パブリックアーケオロジーの実践　1

馬場小室山遺跡と出会って

千葉県八千代市　　蕨　由美

1. 北総から大宮台地の「環状盛土遺構」馬場小室山遺跡へ

私が住んでいるのは印旛沼に近い北総台地で、郊外には、戦国時代の古城址の森と、貝塚が点在する畑がひろがっていて、それらの遺跡は台地を散策する時の楽しみのひとつでもあった。
そのひとつに佐倉市の井野長割の縄文遺跡がある。森の中に古墳のような平たい塚がいくつか見えるその景観は、縄文遺跡といえば貝殻や土器片が散らばる畑ばかり見ていた目には、とても不思議な遺跡であった。大規模な区画整理事業に伴って発掘調査も続けられていて、そのニュースや現地説明会では「環状盛土遺構」の現状をとどめた貴重な縄文遺跡として、保存の方向で検討されているとのことである。

2004年9月26日には佐倉市でシンポジウム『井野長割遺跡を考える～環状盛土をめぐって～』が開かれ、寺野東遺跡ほか関東の環状盛土遺構を巡る熱い討論が繰り拡げられていたちょうどその時、もうひとつの貴重な「環状盛土遺構」の遺跡がなんの報告もされないまま、存亡の危機に直面していた。その遺跡とは、盛土遺構の景観が井野長割遺跡によく似ているというさいたま市の馬場小室山遺跡である。

2004年6月末から馬場小室山で発掘調査が始まっているという情報がネットで寄せられていたので、そのうち現地説明会があれば見に行きたいと思っていた矢先の9月28日、日本考古学協会会員鈴木正博氏の出した「【緊急依頼】馬場小室山遺跡発掘調査ボランティア募集」というメールが六一書房のホームページに転載されていた。それは調査期間延期の要請と専門家ボランティアへの協力依頼を呼びかけると共に、馬場小室山遺跡が、9月30日には不十分なまま発掘調査の終了という最終局面を迎えるというSOSの発信であった。この一本の緊急メールだけの情報以外、遺跡について何の知識もないまま、私はその週末の10月2日朝、現地へ急行した。

その遺跡は大宮台地、さいたま市の緑区三室というところにあった。見沼の奥深い入り江だった低地を埋め立てた三室中学校の南側の台地上に緑の濃い森があり、その森の広い一角が発掘現場であった。すでに2日前に発掘調査の「終了」した静かな現場には、大型住居を含む住居址が累々と重複し、ゆるいマウンドを横断するトレンチの断面には幾層もの堆積が見られ、さらにほとんど埋め戻してあったが直径数mほどの円い大きな穴が残っていた。（写真1）

また、東側の隣接した竹藪を分け入ってみると、そこは大きな窪地になっていて、その奥には祠が祀られている神秘的な森が続いていた。これが盛土に囲まれた「中央窪地」らしい。

考古学に関して素人の私の頭の中には、一週間前の井野長割シンポジウムでの知識しかないことがもどかしかったが、盛土遺構とはこんなにたいへんなものなのだという驚きを感じながら、ひたすらカメラのシャッターを切っていた。

ちょうど前日の東京新聞さいたま版に「縄文遺跡の調査“強制終了” さいたま市教委『最低限は終えた』」というニュースが載り、その記事を見て見学に来ている方もおられた。帰宅後、その記事をインターネットで読んでやっと概要をつかみ、撮影した画像の何枚かを、私のホームページ「さわらび通信」にアップした。このささやかなルポは意外なところからも反響があり、その後、鈴木正博氏ほか馬場小室山と係わる方々と出会うきっかけともなったのである。

2. 縄文遺跡・馬場小室山のすがたとその状況

さいたま市緑区三室は、地形的には東から北にかけて見沼の低地とそこからの多数の溺れ谷のつくる舌状台地の上に、旧石器から弥生・古墳時代にいたる遺跡が形成され、縄文時代の遺跡も多いその真中に馬場小室山遺跡がある。

三室中学校南側から東側にかけて200m四方にわたって縄文中期の住居址の広がる中に、小室神社北側の窪地を中心に直径150mの範囲に晩期に至る大きな盛土遺構５つが環状に形成されており、これらの遺跡群は、昭和44（1969）年以来、32次にわたる調査が続けられてきた。
東側の盛土の端には人面画土器を含む多数の土器が埋納された「多埋設土器群大土壙」があり、また男女の土偶を口縁部に対象的に付けた土器も別の場所から見つかっていて、これらの土器は埼玉県有形文化財にも指定されている。さらにこの遺跡が何よりも特徴的なのは、井野長割遺跡以上に現在でも目に見える環状盛土の遺構であるということだ。

５つの盛土のうち２基が完全に手付かずのままの姿で、また２基が農家の屋敷内で一部家屋の下になっているもののはっきりと盛土の現状をとどめている。

今回、開発対象となったのは、縄文晩期の遺構の姿をとどめたまま旧家の里山として遺されてきた西側約3,000平方メートルの森で、窪地西側の大きな盛土遺構１基も含まれていた。（「馬場小室山遺跡概念図」参照）
調査を担当しているさいたま市遺跡調査会の報告書が刊行されるまでは、今回の発掘調査の詳細な内容も不明であるが、聞くところに寄れば、柄鏡形住居１軒、縄文中期から晩期にかけて住居が16軒検出され、そのすがたは「多層位住居累積盛土遺構」というべき状況であり、さらに２基の「多埋設土器群大土壙」がセットで検出されていた。また「の」の字形石製品、土製耳飾60個、遮光式土偶や筒型土偶１個を含む多数の土偶片も出土しているとのことである。

しかしながら、研究者ボランティアによる異例の応援が連日続けられても、9月30日現在、その西側盛土の約半分の核心部分を含む２割ぐらいが未調査のままであった。

未調査のまま破壊されてしまう前にせめて充分な調査の続行を、そうでなければこのまま遺跡を保存して開発の手から守りたいという鈴木正博氏ほか考古学研究者の切実な思いと、2003年7月のこの土地が競売にかけられた時から5500人の署名をもって里山の保全を市に訴えてきた地元代表の飯塚邦明氏の願いがこの時点でひとつになった。
さいたま市教育委員会、開発業者、日本考古学協会へ相次いで鈴木正博氏の要望書が出され、そ

れらは新設されたホームページ「馬場小室山緊急特設ページ」を通じてネット発信され、東京新聞さいたま版でも「消えゆく遺跡」というコラムが掲載されて、ようやく馬場小室山に関心を持つ人の輪もできつつあったのだが・・・

10月16日朝、とうとう遺跡に重機が入った。その時私はひとり現場で、この状況を見守ることになったのだが、未調査の盛土頂部の大木が根の周りの土ごと次々と倒され、その跡に大きな土器片が散乱していく状況はすさまじく、遺跡の最重要部分の破壊というこの現場になぜ行政の担当者が立ち会っていないのか、怒りより悲しみが突き上げてきた。(写真2)

3. 歴史の中の小室山＝「武蔵の国一ノ宮」氷川女体神社との関係の中で

馬場小室山遺跡は、縄文時代という先史考古学の謎を解き明かす貴重な遺跡であるだけでない。三室郷の文化や宗教、生活とも密接な里山としての歴史を古くから持っていたが、それは、現在の芝川低地、通称「見沼たんぼ」がかつて内海であった頃より、見沼流域の祭祀権を代表する「武蔵の国一ノ宮」氷川女体神社の奥山であったからである。

井上香都羅氏の『みむろ物語～見沼と氷川女体神社を軸に』を紐解きながら、歴史の中の三室とその中の馬場小室山を歩いてみよう。

現在、東北道の浦和インターから大宮台地の三室へ行く途中、新見沼大橋から、眼下には「見沼たんぼ」の低地、北側の台地の縁には、樹林に覆われた氷川女体神社の森を見ることができる。この新大橋からの光景は、中世以前の人々が見沼の水上から日々目にした景観であったに違いなく、そして女体神社の森の西奥には、馬場小室山の樹林が今よりもっと大きく見えたはずであった。

現在この神社は、「見沼代用水西縁」という用水にかかる赤い橋を渡り、階段を登った先に巨木の社叢林に包まれた神社本殿が鎮まっていて、その本殿正面の軒には、「武蔵国一宮」と書かれた額が金色に光っている。この女体神社の主祭神は奇稲田姫命、そして芝川を遡った大宮の氷川神社は須佐之男命と共に出雲系の神々を祀る。そしてこの女体神社と大宮氷川神社、中川の中山神社(氷王子社)の3社で、見沼を中にして共にひとつの氷川神社を形成し、女体神社も「武蔵国一宮」の格式を有していたと考えられている。(写真3)

氷川女体神社は、神社に伝わる南北朝時代の大般若経などの書込みに「御室女體大明神」などと記されていることから、三室は「御室」であり、見沼は神社の御手洗瀬としての「御沼」であった。女体神社には、古墳時代の鉄鈴をはじめ、鎌倉時代執権北条泰時の奉納といわれる兵庫鎖太刀や桃山時代の神輿などの、古代から中世にかけての有力者の崇敬を物語る文化財が伝えられてきた。

このように女体神社が中世までこの地に君臨していた背景には、御手洗瀬として見沼の水運と漁労権を支配していたことが大きく、往古から行われてきた御船祭りは、その神域の確認を兼ねていたと想像できる。隔年に行われたこの祭りは、旧荒川で潔斎してから沼の真中の御旅所まで一里ほど神船をこぎ出し、四本の竹を挿し立てて注連縄を張った中で、神酒などを奉げる儀式である。

1989～1991年第一調整池建設に伴って発掘調査された四本竹遺跡からは、古銭や790本のおびただしい数の祭竹が出土した。字「四本竹」とよばれたこの地は、四方を竹で結界して行われた御船祭御旅所の祭祀跡とされ、その起源は発掘調査で見つかった竹の本数から、古代まで遡る可能性も示唆されている。また、この祭儀に用いられた一対の牡丹唐草文瓶子は中世陶磁器を代表する15世紀の美濃焼として東京国立博物館に納められ、御座船に載せられた神輿は桃山時代の作として、瓶子とともに県の文化財に指定されている。

その後江戸時代に入ってから、見沼は干拓により「見沼たんぼ」となり、その新田開発の代償に、神橋の向こう正面に小さな池に浮かぶ柄鏡形の祭祀場所を確保し、かろうじて御船祭りを「磐舟祭」としてその神事を伝えてきた。さらに、明治の神仏分離と神社の統制政策は、大宮氷川神社の繁栄と、女体神社の衰退の道を開くこととなり、その磐舟祭も久しく途絶えていたが、鬱蒼たる境内の樹林とその景観は古代から中世の神々しい神域の姿を髣髴させてくれる。

この女体神社の西方0.7ｋｍのところの台地上に、馬場小室山の小室神社がある。女体神社の本殿は見沼を見据えるようにほぼ東向きに建てられているので、その拝殿に額づくと、本殿のやや左背後にこの小室神社を拝むことになる。
見沼は「御沼」、三室は「御室」であったが、室(むろ)というのは、奥の塗込め寝所や山腹の窟を指し、そこはまた神の住み籠る場でもあった。『江戸名所図会』に「宮本籔川大明神の社」は「宮本郷三室山の南麓にあり」とある。小室神社のある小室（おむろ）山もまた聖なる奥山としての「御室山」、あるいは宮本郷三室山と対の小室（こむろ）山であったとすると、女体神社と祭神も同じ水の神を祀る小室神社はその奥宮だったのではないかと思われる。

4. 村里の風景と「神山の祖霊信仰」

小室山の一帯が女体神社の奥山ではないかとも思われるのは、小室神社と小室山を家代々の守ってきた武笠家の存在と、明治維新時の廃仏毀釈で女体神社から別当寺の文珠寺が分離された際、この地に移転してきたという縁である。
小室神社へは、松ノ木バス停から三室小学校方向への道を行き、苔むした石仏のある三叉路を右へ入る。この石仏には、安山岩に江戸初期から中期ごろの様式の三面六臂の馬頭観音像が刻まれていて、右には「是より○○」、左には「武笠杢左エ（門？）」の刻字がある。
ここは馬場と東宿の境なのだが、「是より○○」が「是より小室明神」なのか「是より東宿」なのかは不明である。路地の先には鳥居、その奥に小さな祠ではある小室神社がある。祠の周りには、

灯篭（「昭和六年」銘）や狛犬（「昭和四年　武笠市太郎」銘）、「辨財天」石碑（「明治四十三年　武笠氏」銘）なども寄進されていて、その境内地はいまだ武笠家本家の所有とのことであった。（写真4）

この小室神社は、明治40年神社合祀令で、強制的に女体神社に合祀され整理されたはずだが、実は武笠家の屋敷神として大樹の茂る森の中にひっそりと残っていたのである。

馬頭観音石像の前を曲らずに通り過ぎ、三室小学校の方へいくと、小室山を背後に従えた大きなお屋敷が3軒ある。いずれも馬頭観音にも名前が刻まれている「武笠」氏一族の旧家で、西側のお屋敷の武笠吉久氏は14代目の御当主とのことであるから、江戸時代初頭以前にはもうここに屋敷を構えていたのであろう。

武笠氏一族の祖先は、古代より氷川女体神社の祭祀者で、その由緒書きでは足立郡国造だった「佐伯朝臣」にさかのぼるとされていて、武蔵国の祭祀権を司ると同時に、在地豪族として、また武士団としての力も持っていた。小室山の武笠家もこの神主家から出た旧家で、かつては格式のある儀礼用の長屋門もあった。この門は、婚礼や葬儀などに開かれる儀礼用の長屋門であるが、普段は広い土間がそのまま作業場となる生活に密着した門で、江戸時代後期長屋門の代表として旧浦和市指定有形文化財に指定され、現在は「浦和くらしの博物館民家園」に移築公開されている。その先の三室小学校の隣に、文珠寺がある。女体神社は、南北朝時代の大般若経600巻を今に伝えてきたように、明治維新時まで神仏習合であり、女体神社脇にあった文珠寺が別当を勤めてきた。神仏分離後、三室の小室山の隣接地に移ってきたこの文珠寺には、神主家出身の武笠松渓という画家が文政13年（1830）から元治2年（1865）に描いた3面の大絵馬が掲げられている。また近くの藤林家には同じく南北朝期の釈迦三尊種子板石塔婆が伝えられているが、藤林家もまたこの寺とゆかりが深かった家であった。

これらの旧家のたたずまいの景観を一段と際立たせているのが、武笠家背後の小室山の森で、2004年に伐採される以前は樹齢を重ねた大木が生い茂り、遠くからも小室山と認識できる姿を保っていたという。この山は女体神社神主家武笠家の一族の所有で、女体神社の森と同様に古代から耕作すらされない原始のままの神聖な森であった。そしてそこには女体神社と同じ祭神を祀った小室神社が、環状盛土遺構という謎の縄文遺跡の上にあるのだ。
井上香都羅氏は、『利根川24.25』で「早水台遺跡、今なお続く神事」と題して、現在お住いの別府市隣の日出町の旧石器・縄文の早水台遺跡では、昔から聖なるこの丘での祭祀が昭和の時代まで引き継がれてきた事例を紹介されているが、私にとって身近な八千代市の神野貝塚や佐山貝塚、また印旛沼をはさんだ印旛村石神台貝塚などでも、まさに遺跡に中に原始・古代に遡るとみられる神社が今も斎き祀られている。

馬場小室山に関しても、井上氏は『みむろ物語』で、「この一帯では・・神山の祖霊信仰が行われていた」と述べているが、この小室山の不思議な縄文遺跡の謎が明らかになるとき、原始から古代への氷川神社信仰の本質もよりはっきりと解き明かされてくるであろうと思う。

5. 馬場小室山遺跡＝その後の展開と展望

2004年10月23日、重機によって破壊、撹乱された現場で散乱した土器片を皆で拾った。「残存埋蔵文化財の保護」を目的に、長野から考古学研究者も駆けつけ、私たちは土器の見方を教えてもらいながら、その複雑な様式や種類の多さに目を見張った。このグループワークは、その後、11月の現地見学会、そして12月の第1回馬場小室山遺跡研究会、2005年1月の小室山セミナー開催へと発展し、その後も毎月のように市民と考古学研究者、若い考古学学徒、自治体の文化財担当者が集い、共に学びながら、遺跡の重要性を客観的に解明する場として今に至っている。2005年3月に入って、市有地の立ち木が新住宅造成地のじゃまになるからという業者側の要請で重機が無造作に市有地に入り樹木を伐採するという事態や、遺跡から搬出した多量の遺物包含層の廃土を見沼田んぼの低地に埋め立てるという文化財保護法上忌々しき状況が発覚した。ちょうど市民による史跡予定地の清掃イベントを企画中のことであったので、ただちに現地視察を合わせて行い、市にも善処を強くお願いしている。

また、飯塚氏・鈴木氏の働きかけにより、2004年12月のさいたま市定例議会での鳥海敏行議員・岡真智子議員の質問に対し、中央窪地と北側盛土（「1号土塚」）の市有地を市の史跡とするとの市側の答弁をいただいた件に関しては、2005年3月29日その指定を得ることができた。そして当初考えていた2004年9月30日調査強制終了の一周年行事「フォーラム小室山の日」の企画は、現在広く市民にも参加を呼びかける「史跡指定記念フォーラム」として、2005年10月2日の実現をめざしている最中である。

馬場小室山遺跡は、環状盛土遺構という縄文の集落と社会を解明できる重要な遺跡でありながら、埋蔵文化財行政の不適切な典型事例となってしまった。そして市町村合併に伴う埋蔵文化財行政の安易な合理化の流れの中で、各地でも第2、第3の馬場小室山遺跡が出てくるのではないかと、考古学研究者や他の自治体の担当者にも深刻な危機感をもって受けとめられはじめてきている。考古学研究者と文化財行政担当者が、市民とともに学びあいながら遺跡の重要性や調査の学術的な成果を共有し、その活用を行政に提案していくことが、この危惧される状況を打破できる道だと思う。今、その実践が、満身創痍の馬場小室山遺跡の森から始まろうとしている。

参考文献

阿部芳郎　2004　「国史跡級遺跡に最大の危機　－熱いまなざし注がれるさいたま市馬場小室山」『しんぶん赤旗』10月20日号
浦和市郷土文化会　1984　『馬場小室山遺跡』さきたま出版会
浦和市教育委員会　1994　『浦和市出土品百選』
井上香都羅　1998　『みむろ物語－見沼と氷川女体を軸に－』さきたま出版会
青木義脩　1982　『浦和の歴史と文化を知る本』さきたま出版会
野尻靖　2001　『氷川女體神社』さきたま出版会
埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第122集　1992　『四本竹遺跡』
井上香都羅　2003　「早水台遺跡、今なお続く神事」『利根川24.25』
鈴木正博　2004　「馬場小室山遺跡の『環状盛土遺構』と考古学研究上の意義」小室山セミナー講演録　ホームページ『さわらび通信』http://homepage1.nifty.com/sawarabi/

追記：本原稿は2005年5月21日発刊の『利根川　27』の元原稿（2005.4.2現在）です。